

映画『第三の男』の構成とヴィジョン

兵 頭 晴 子

(1)

Us MP: Passport please...
Martins: Oh.
Us MP: What is the purpose of your visit here?
Martins: A friend of mine offered me a job here.
Us MP: Where are you staying?
Martins: With him. 15 Stiftgasse.
Us MP: His name?
Martins: Lime—Harry Lime.
Us MP: Okay.
Martins: I thought he'd be here to meet me.

(下線は筆者)

映画のはじめにナレーションで第2次世界大戦後まもないウィーンの様子が手短かに語られたあと、ストーリーが始まるが、これはその冒頭の部分である。上の、約12秒のシーンの中に、この映画のキーワードが3つ（下線部）示されている。それぞれのキーワードには次のような意味がある。

パスポート—アンナ・シュミット (Anna Schmidt) はチェコスロバキア人であるが、ハリー・ライム (Harry Lime) の世話で、偽造のパスポートを作ってもらった。このパスポートが偽造であるがゆえに、彼女はたびたびロシア警察に脅かされる。また、偽造であることを黙認する代わりに、ハリー逮捕に協力することをイギリス憲兵隊に依頼される。さらに、偽造パスポートを持つ彼女を救うためにホリー・マーティンス (Holly Martins) はハリー逮捕に協力する。以上のようにパスポートがストーリーを展開させるきっかけとなっている。

仕事—ハリー・ライムと一緒に仕事をしようと申し出たので、ホリー・マーティンスはアメリカからはるばるやって来る。ところが到着してみると、ハリー・ライムは交通事故で死亡していた。警察では、ハリーのような最悪の闇屋は死んで良かったのだと言われる。ハリーの汚名をそそぐために、マーティンスは素人探偵のように調査を始めたのだが、

「盗人を捕えてみれば我が子なり」というべきか、調べてゆくうちに、ハリー・ライムの仕事とは、殺人までも含む、とんでもない闇商売であることが判明してゆく。その発見の過程と結末が描かれている映画であるとも言える。

ハリー・ライム—警察も、ホリー・マーティンズも、アンナ・シュミットも、みんながハリー・ライムを追いかける。これがストーリーとなっているとも言える。

死んだと思ったハリー・ライムが生きていることを知った警察は、ハリーを下水道まで、追いつめる。犯人として、ホリー・マーティンズは親友として、ハリーの汚名をそそぐために、危険な目にあいながらも必死で捜査を続けるが、ハリーの悪事を知ってからは、正義感からも彼の逮捕に協力し、ハリーにとどめの発砲をする。彼は友人としてハリーを追い続けた。アンナ・シュミットは元恋人としてハリーの思い出を追っていたが、生きていると知ってからは、ハリーの居る場所を追ってゆき、恋人として彼を守ろうとする。

以上、三者三様の形でハリーを追いかけてゆくのがこの映画の主筋である。副筋はアンナ・シュミットに対するホリー・マーティンズの恋である。このように、わずか12秒のシーンの中に、映画全体の内容が見事に呈示されている。

(2)

次に、動物や人が、他の登場人物の一面や事件の性質を表わす役割を持つ例を4つあげる。

①Anna: He never grew up. The world grew up round him, that's all—and buried him.

(下線は筆者)

これは、アンナがハリー・ライムについて言っていることばだ。「少年時代はどんな子だった？」とアンナに聞かれて、ホリー・マーティンズは思いつくままに答える。「僕のガール・フレンドを取ろうとした」、「何でも面白おかしくしてしまった」、「試験の前に熱を出すとか、実に上手いカンニングペーパーを作るとか、しなければいけないことを逃れるとか・・・」「14才で僕にスリーカードトリックを教えてくれた。かなり早熟と言えるね」これに対してアンナは上のような言い方で応じる。

この映画の中で、ごく短いシーンで二回だけ子供が登場する。ホリー・マーティンズがアンナ・シュミットを伴って、もとハリーが住んでいたアパートに行く。アパートの門番に、ハリーが事故にあったときの様子を聞いていると無言電話がかかってくる。事件から手を引けという警告だとすぐに察した門番は、急に声を荒らげて、ホリー・マーティンズに帰ってくれ、と言う。そのとき5才ぐらいの男の子が、ちょうどその部屋の中に転がって入ってしまったボールを取りにきて、興奮している門番の様子を見ている。

その後門番は、自分が見た、事故直後の様子をホリー・マーティンズに教えてやろうと考え直し、今晚家にきなさい、とホリーに声をかける。その直後、門番は口封じのため殺される。約束通り、夜になってマーティンズが門番の所に来て見ると、門番の遺体が警察の手で運び出される所であった。見物の人だかりの中に前出の男の子がいて、「この人が殺したんだよ」とホリーにしつこくつきまとう。この子の名はハンゼル (Hansl)。そして、ハンゼルとまわりの大人たちがホリーとアン

ナのあとを追いはじめたので二人はあわてて早足で立ち去る。

この男の子の出現によって、ハリー・ライムおよびその仲間の行った殺人の罪は、身に覚えのないホリー・マーチンズにきせられている。これはハリー・ライムが昔、子供のときからホリー・マーティンズにしてきたことではなかったか。昔、賭博場が手入れを受けたとき、ハリー・ライムは安全に逃れる出口を知っていた。ハリーは逃げおおせたがホリー・マーチンズは捕まってしまった。そういえば、やや丸顔のこのハンゼル君の顔は、いくらか、ハリー・ライムに似ているようにも見える。小さな子供は、ひどく残酷なことをしたり、事実でないことを事実であるかのように言うことがある。そして責任をとることは考えない。良心の呵責を感じることもない。このようなハリー・ライムの一面を、ハンゼルが表わしているのではないか。アンナの言うように子供がそのまま大人になっていると感じさせる部分は他にもある。たとえば、死んだと思われていたハリー・ライムがマーティンズの前に初めて姿を表わす場所は遊園地である。遊園地には「遊び」、「子供」のイメージがふさわしい。子供を感じさせるもう一つの要素としてチャタールによるバック・ミュージックがあげられる。ハービン、門番、ペイン、ハリーと4人もの人が死んでいった。そうした重苦しさは、映画を見終わったあと、あまり感じられない。軽快で飛び跳ねるようなこの曲は、子供の歩き方のリズムに近い。このバックミュージックが始終流れ、鳴り響くとき、観客には、事件の重大さはいくらか軽く印象づけられるだろう。はじめてハリーが登場するとき、彼は歩きながらピョンと跳ぶ。下水道の中でも、あの体格からは予測できないような、軽い動きをする。この歩きのリズムにおいても、ハリーとハンゼルは重なっている。この音楽は、事件に対するハリー自身の「軽い気持ち」を示すと同時に、最悪の事件をおこしているハリーに「神」、「慈悲」といったことを口にさせることにより、彼の良心のかけらをかいま見せる監督、演出者のヴィジョンも示している。この映画には、ハンゼル以外の子供は全く登場しない。街の風景などが写されても、子供の姿はどこにも見当たらない。はじめてザッハホテルが写されたとき、背景の中にほんやり10才ぐらいの少年が少しのあいだ見えるが、また10代と思える少年少女も登場しない。一番若いのはアンナ・シュミットで20代であろうか。ホリーもハリーも30代か。キャロウェイは40代、門番夫婦は60代、ハリーの仲間は50代ぐらいに見える。子供と若者がほとんど出てこないのは、ハンゼルを映画の中にくっきりと浮かび上がらせるためではないか。事実、ハンゼルは実に印象的である。

ハリーとホリーという名前は良く似た感じでまぎらわしい。事実、アンナは二回もホリーを誤ってハリーと呼んでいる。全く正反対の性格の二人だが、似たような名前で混同されることと、ハンゼルが出てくると、彼を支点として、くるりとホリーとハリーの立場の入れ替えが行われてしまう一つまり、ハリーの仲間が門番を殺したのだが、その罪がホリーにきせられそうになるなど一こととは全く無関係ではないだろう。グリーン原作ではホリー・マーティンズでなくロロ・マーティンズ (Rollo Martins) となっていたが、この名前には、マーティンズを演じたアメリカ人の俳優ジョセフ・コットン (Joseph Cotton) が反対したそうである。そこでちょっと風変わりな詩人からホリーという名を取ったとグリーンは述べている。このときハリーと似た音の名を選んだのだろう。不器用だが正義感が強く、誠実なホリー・マーティンズと、気転がきいて、器用で、自分の利益のためには、すべてを平気でふみにじるハリー・ライムは正に白と黒、正反対の性格である。ジキルとハイド、ウィリアム・ウィルソンの二人の間にハンゼルが介在している。

②Kurts: So you have found out my little secret. A man must live.

ホリー・マーティンズがクルツに会いに、カザノヴァクラブにやってくる。クルツは貴族出身(男

爵)ではあるが、戦後の混乱の中で、生活のかてとして、カザノヴァクラブでバイオリンを弾いている。他にハリーらとともにあくどい闇取引もしている。彼は、客のひとり、とりわけ醜女に見える女性に寄り添うようにして、美しいヴァイオリンの音を響かせる。この女性は二回ほど大写しになり、後に背景の中に一度写される。彼女が大写しになったとき、スプーンをべったりと、ふ厚い唇でなめとるシーンがある。この美しいヴァイオリンの音は、クルツの表面上の気取りを示しているだろう。また、ハリー・ライムの子供のような残酷さ、無責任さをハンゼルが表わしていたように、この醜い女性はクルツの、そして、彼の闇取引仲間達の醜い精神状態を体現化しているのではないだろうか。何でも大口あけて吸いとりとうる汚れた心をこの女性の映像に託しているようだ。

③Martins: (the cat is) Not very sociable, is he?

Anna: No, he only liked Harry.

(カッコ内は筆者)

アンナの家に立ち寄ったホリー・マーティンズは、彼女の飼っている猫を、猫じゃらしの要領で遊ばせようとするが、猫は全くかわいげもなく大あくびをして、しらん顔をしてむこうへ行ってしまう。愛想の悪い猫だ。ハリーにしかなつかないと言う。映画の最後のシーン、墓地から長く続く並木道で、愛するアンナに声をかけようとしてたたずむマーティンズには目もくれずに、完全に無視して行ってしまうアンナの姿と、この猫のイメージがダブる。猫はアンナの心情をイメージ化して表わしている。猫や犬は、その飼主の道徳的判断には関係なく、なつく。エサを与えて一緒にいてくれればそれで十分なのだ。ハリーがどんな悪事を働いていたかを知って「彼は死んで良かったのよ。あそこまでひどいことをしていたなんて。」と彼女は言うが、いざ、ハリーを逮捕する段取りになると、飛び出してきて妨害する。頭ではハリーのしたことを理解しても、彼女の感情はいつもハリーに寄り添っていたのだ。通りに立つハリーの足許に身をよせて、幸せそうに、ハリーの足に手をかけている猫の姿はそのままアンナの心情を示している。

④Martins: A parrot bit me.

現代小説についての講演会で話をしてほしいと英軍の広報担当者クラビン (Crabbin) 氏にホリーは頼まれている。しかしホリーは忙しい。カザノヴァクラブでポベスク (Popescu) に、ハリーが事故にあったときの話を聞く。ポベスクの話と門番の話がかみ合わない。誰かが嘘をついていると思う。次日ハリーのアパートにゆくと門番が今夜色々教えてくれるという。期待してアンナとともに門番をたずねると、すでに彼は殺害されており、しかもマーティンズは男の子に犯人よばわりされて、ほうほうの体で逃げ出す。すぐキャロウェイに報告に行くためホテルの前で待っていたタクシーに飛び乗ると、タクシーはあらぬ方向に猛然と進みはじめる。自分も門番のように殺されるのかとおびえるマーティンズ。車が停車するととびだして、壁を背にして身構える。そこへクラビンが表われ、彼は講演会場へ連れてこられたことがわかる。講演会のことなどすっかり忘れて、何も用意していない。ホリーは西部劇専門の大衆作家であるのに、聴衆は純文学に関する質問ばかりしてくる。当時、最新の「意識の流れ」(Stream of consciousness) などホリーは聞いたこともない。聴衆の質問の仕方や口調が、ホリーをバカにしたような言い方だ。ジェイムズ・ジョイス (James Joyce) に関する質問にも答えられない。聴衆はあきれて帰ってしまう。そこへポベスクが殺し屋二人をひきつれて登場する。追われるホリーは、逃げこんだ部屋の中にいたオウムに咬まれる。そ

のままホリーは窓の外へさらに逃げてゆく。

オウムは、文学通ぶって小うるさい質問をペラペラとしてくる講演会の聴衆と似ている。彼らとはげのある言い方で、咬みつくように質問する。オウムはせまってくる恐るべき殺し屋の予告でもある。質問者の精神的攻撃と殺人者の実質的攻撃は、咬みつくオウムのイメージで示される。

(3)

Balloon Seller: Mein Herr, Balloon?

(だんな、風船はいかが?)

ここでは「くり返し」の効果について考えたい。この映画は墓地における葬儀で始まり葬儀で終わる。両方とも、ハリー・ライムの葬儀の筈であったが、実際には、初めはジョゼフ・ハービン (Joseph Harbin) の、そして、最後のものは間違いなく、ハリー・ライムのものであった。このように、この映画の中では、似たような内容の出来事が2~3回繰り返されることがある。いずれの場合もくり返しの最後の出来事の方が重大な内容であり、最初のものは、内容がより軽かったり、パロディのようであったり、時には滑稽であったりする。

次に、ハンゼルという5才位の男の子の例をあげる。彼の持っていたボールが跳ねて、ハリーの部屋の中へ入ってしまった。中では、事故の説明をしていた門番が、無言電話という警告におびえて急いでホリー・マーティンズを帰そうとしている。ボールを追ってきたハンゼルは、傍観者として、その様子を眺めている。2回目に登場したとき、ハンゼルは、門番の遺体が運び出されるのを見ようと集まった大人たちの中にいる。ホリー・マーティンズが近づくと、彼が門番を殺したのだと言いたてて、マーティンズを追ってくる。

ハリーの事故についてはしゃべるな、という門番への警告は、「あなたに電話がかかっているから、どうでも家に入りなさい」という妻の優しい呼び声でなされる。次には無言電話がかかる。最後に本人が殺されるという形で進む。さらに、この映画にしては珍らしく、遺体を運び出すシーンまである¹。なぜだろうか。門番 (porter) という語には、port=戸の意味が含まれる。全くわからない事件のはじめの手がかりをホリー・マーティンズに与えてくれたのがこの門番である。交通事故現場には、警察に出頭した2人の他に第3の男 (the third man) がいたことは、彼が教えてくれたのだ。彼は暗い事件の世界の戸を開けて、マーティンズにしばしその状況を見せてくれた、彼の手引きをしてくれた人である。その案内人とも言うべき人が死んだことをはっきり示すため、たくさん見物人や遺体を運び出すシーンを加えたのだろう。この後、マーティンズは前よりも更に危険な目に会いながらも、事件についての理解を深めてゆくのである。警告は次第に強くなり、最後は殺人にまで至っている。

また、ホテルの前にとまっていたタクシーにマーティンズが乗りこむやいなや、マーティンズの声には全く耳を貸さず、運転手が殺人的スピードで車をとばす。マーティンズは殺し屋の所へ連れてゆかれるのかと思いき、降りたとたん、逃げの体勢に入る。しかし、車が到着したのはクラビン氏が待つ講演会場であった。めまぐるしくおきる事件に目を奪われ、クラビン氏と約束した講演会のことをマーティンズはすっかり忘れていた。壁に背をむけて、横這い状態で身構えるマーティンズの前で、さっとドアが開き、クラビン氏が「お待ちしてました」とにこやかに迎える。その瞬間、壁にはりついているマーティンズの姿は何とも格好のつかないおかしなものとなる。講演会会場では聴衆の質問に答えられず形無しであった。また、暗殺者に追われる途中、オウムにかまれた指を

思わず口にくわえる姿も少し滑稽である。タクシーで殺し屋のもとに送りつけられたと思ったのは感ちがいであったが、その1,2時間後には実際、本当の殺し屋に追われる。また、はじめに講演会の聴衆に攻撃され、次にオウムに攻撃され、最後に殺し屋に攻撃されるというふうに、攻撃のパターンがくり返される。

この後、キャロウェイの執務室で、ハリーの悪事を証明するスライドを見せてもらうことになるのだが、本当の資料が出る前に、ペインの手違いで、なんと、サイの写真という、全く場違いなものが写される。マーティンズがおそらく目をこらして待っている所へ、何かふみはずしたような、滑稽なシーンだ。それから、ハリーの悪事の動かぬ証拠が次々示される。

この証拠にも増してマーティンズが心を動かされたのは、犠牲者となった子供たちだった。ハリーが流した水増しペニシリンのせいで、多数の子供が死んだり、痴呆状態になった。その子供たちを病院で見て、マーティンズはハリー逮捕に協力する決心をする。マーティンズがおとりとなって、夜、市内の喫茶店で待ち受ける。まわりを警察がびっしり固めている。皆が息をつめて待っているところへ大きな人影が現われた。緊張が走る。が、実際にはよろよろと足をもつれさせながら風船売りの老人が現われ、しつこく風船を買ってくれとせがむ。やむなくペインが一つだけ買う。そして緊急体勢の中で風船を手を持つという格好をするはめになる。次にアンナが現われて、おとりをつとめるホリーを責める。その後からハリーが現われる。昼間、風船を売り切ることのできなかった老人が疲れきって帰路につくとき、ハリー逮捕の包陣へ迷い込む。アンナは、ハリーを逃がすために喫茶店にかけつける。二人もの意外な人物が次々と現われたあとに、ハリーが現われる。風船売りの老人から見れば、警官たちは無愛想でケチである。彼らは風船を一つしか買ってくれない。アンナから見れば、ホリー・マーティンズはとんでもない卑怯者だ。褒賞めあてに友人を警察に売り渡している。アンナには、ホリー・マーティンズの正義感などわからないし、わかりたくもない。このように、ハリー・ライムの逮捕劇は、人物によって全く異なる解釈がなされることも示している。

また、私たちは、昔、聞いたことのある歌を聞いたり、ある歌のリフレインを聞くとある種の心地よさを感じる。以前に経験したことがあるものは、私たちの心の中にたやすく入って来る。旧友に出会ったときのように。同様に、映画の中に同じ登場人物が再び出てきたり、同じようなでき事が繰返されると、その出来事はより深く私たちの心に印象づけられるのではないか。同じ出来事のパターンは、たとえ意識的には理解していなくとも、どこか無意識の奥に何らかの記憶として残る。それゆえ、2回目以降は再認識という形をとるのでより強い印象を与えらると思われる。

(4)

Harry: What fools we are.

最後に、映画の中でたびたびくり返される「愚か」ということばについて、及び、それに関連して、「賢い」(sensible) ということばについて考える。(以下下線はすべて筆者)

Martins: When I've finished with you—you'll leave Vienna, you look so silly.

ウィーンについたばかりのマーティンズがキャロウェイに投げつけたことば。警察はハリーに罪をきせて一件落着としていると思い、マーティンズは探偵よろしく調査を始める。汚名をそそいだあかつきには、キャロウェイは恥ずかしくてウィーンにいられないだろうというつもりで言ったことば。

(305)

- 30 -

Martins: Silly looking bunch.

キャロウェイへの反感もあって、カザノヴァクラブへ見回りにきた警官達にマーティンズが投げつけたことば。

Anna: Be sensible. Tell Major Calloway.

ハンゼルに殺人者扱いされ、あわてふためいて逃げこんだ映画館の中で、マーティンズが「これからどうしよう」と心細そうに言うと、アンナに「しっかりなさい。キャロウェイ大佐に話しなさい」と言われる。

Calloway: Oh, stop behaving like a fool, Martins.

保安官気取りで「真相をあばく」と意気こんでいたマーティンズだが、殺し屋におそわれて大あわてで逃げる時、オウムに指をかまれる。殺し屋に追われた顛末をキャロウェイに話している最中、「指はどうした」とキャロウェイに聞かれ、「オウムにかまれた」と事実を言ったのだが、キャロウェイは本当にしなかったのかもしれない。「こんな危ないときにバカなことをしている場合ではないだろう」位のところか。

Martins: I'm only a little fool—I am an amateur at it—You're a professional. You've been shaking your cap and bells all over town.

「僕はたしかにバカなことをやってきたが、とりあえず探偵としてはアマチュアだ。キャロウェイ、君は本格的な道化と言って良い。道化よろしく道化帽を被り、鈴を町中に響かせて自分のバカさ加減を見せつけている」キャロウェイはプロフェッショナルであるのに、ハリーに対する判断を間違っている。憲兵隊長としては大バカ者だと言っている。

Martins: I suppose he was langhing at fools like us all the time.

ハリーがひどい悪事を働いているとは知らず、マーティンズとアンナはそれぞれ、親友、恋人としてつきあってきた。我々を欺して、バカな奴らだと思っていたのだらうな、ハリーは、とアンナと話しあっている。

Martins: You...won't be such a fool, of course.

かく言う自分も三文作家で飲みすぎでほれやすい。けどアンナ、君はそんなバカではないよね、と自分のことをfoolと言っているマーティンズ。

Anna: Martins always said you were a fool.

キャロウェイは、アンナがハリーの生存も居場所をも知っていると思い、彼女からハリーの居場所を聞き出そうとする。何も知らないアンナは、キャロウェイにますます反感をつのらせて言う。

Harry: What fools we are talking to each other this way, as though I'd do anything to you—
—or you to me.

悪事を働き続けると牢屋行きになるぞ、と警告するハリー・マーティンズに対して、君しか知っている人はいないのだから、君を消せば問題ない、と言う。險悪になりかかった所で、マーティン

ズが、ハリーの墓を掘り起こした事を語る。ハリーの生存を知っているのはホリー一人ではないことを知って、ハリーは、お互い、バカなことを言いあったな、とごまかす。

Anna: I loved him. You loved him. What good have you done him? Love! Look at yourself— they have a name for faces like that.

マーティンズは、愛するアンナに正規のパスポートを出してもらう条件で、ハリー逮捕に協力する。そのおかげで、アンナは帰国する列車（と思われる）に乗りこんでいた。だが、ハリー逮捕とひきかえにされたことにアンナは腹をたて、パスポートを破ってしまう。「なんてバカな顔、卑怯者の顔！」というところだろうか。

Anna: Honest, sensible, sober, harmless Holly Martins. Holly, what a silly name! You must be very proud to be a police informer.

一度は警察に協力することをやめる決心をしたホリー・マーティンズだが、ハリー・ライムの売りさばいたペニシリンを使用して、脳膜炎や精神異常になった子供達の病院を見学して、また、決意が変わる。再び警察に協力しておとりとなってハリーを待っていた所へ乗りこんできたアンナがマーティンズに投げつけることば。恋人のことだけを一途に思い、マーティンズに立腹している。

Calloway: Be sensible, Martins.

Martins: I haven't got a sensible name.

ハリー・ライムの本当の葬儀のあと一人帰るアンナとこのまま別れられないと思ったマーティンズは、キャロウェイの運転する車からおろしてもらう。アメリカに帰る飛行機にも間に合わなくなるかもしれない。それに、アンナの気持がマーティンズの方へ向いていないのも明らかだ。それでキャロウェイが「あまりバカなことはするな」とたしなめるが、マーティンズは以前アンナに「何てバカみたいな名前」と言われたことを思い出して「名前からして賢くないからな」と言う。

このように、この映画の中ではくり返し「賢い」と「阿呆」の意味でsensibleとfoolが使われている。foolやsillyという語は、

1. 警察および警察官に対する反感を表わすため
2. ハリーに上手に手玉にとられていたのだという認識を得たアンナとマーティンズが自分たちを評価して使う
3. 素人なのに危ないことに手を出すな、とマーティンズをいましめるキャロウェイのことば
3. ハリーに罪をきせているキャロウェイは筋金入りのバカだとマーティンズが自信をもってけなす
4. お互い足をひっぱるようなバカなことはやめて賢く行こうとマーティンズを誘うハリー・ライム
5. ハリーを売ったマーティンズに対してアンナが投げる怒りのことば。ついでに名前までバカげている、と坊主憎けりゃ袈裟まで…の勢いでやっつけられる

こうして見ると、foolやsillyの使い方は誤解や怒りの感情をぶつけるものと、我々人間は愚かなものだなあという認識とがある。マーティンズに起こったことは悲劇だともとれるが、彼のしていることは道化的、ピエロのようだととることもできる。何をやってもうまくゆかない不幸なピエロ。

阿呆の道化。この映画にはチャプリンの映画と一脈通じる所があるような泣き笑い、一生懸命だがうまくゆかない人間に対するあたたかみ、及び、最後はハリーの死をもたらした正義感が漂う。ハリーは極悪な闇商売をしたが、「神や慈悲」を信じているともらすときもある。また、マーティンズを「信じて」喫茶店まで会いにやってくる。何か人間的な心の「かけら」ぐらいはあるように描かれており、悪一色に塗りつぶされていない。ならば、その信じる心によって、ハリーの心が反転し、ホリーのよう人間味のある人物に変わるような可能性が、かすかにではあるが、示唆されているかもしれない。ハリーのイメージ「子供」は、純心で、きれいな心の象徴でもあるのだから。² 恋人の死を二回も経験するアンナは、ハリー以上に悲劇的である。彼女が長い並木道を硬い表情で通りすぎてゆく。しかしあの道はずっと続くように見える。あの軽やかな音楽にいつも付き添われて。エンディングではあの音楽が未来を照らす一助となっているように思える。愚かな人間たちであるが、救いの可能性もあるのだ、というふうに取りれる。

著者グリーン自身が原作の小説より映画の方がはるかによく出きていると述べている通り、この映画は、ほんの一秒の映像でも、無駄なものは一切入っていないと思われる完成度の高いものである。

注

1. この映画では激しい場面、不快な場面は直接映像化されることはまずない。たとえば、ハービンが事故死を装って殺される場所、ハリーの代りにハービンの死体が入っている棺を確認する場所、門番の殺害シーン、ハリーがホリーに打たれる瞬間など。いずれも音や他の人の表情によって表わされる。ただ一ヶ所、ペインがハリーにうたれる所だけは、はっきり写されている。ホリーの正義感をいやが上にもかきたてるためだろうか。
2. 「純粋に愛と喜びの中に生きようとする生命そのものの相^{すがた}をもったものが子供たちであった」と、鈴木鎮一氏は子供の良き側面をとらえている。(『愛に生きる』、講談社現代新書、1966)